**説教20240303出エジ17：1-7ローマ5：1-11「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を」**

**「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を」「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を」このイエス様の御言葉は、主の十字架の苦難を覚えつつ受難節を歩んでいる私たちにふさわしい御言葉です。私たちはこの御言葉を毎日いつもいつも聞きながらこの日々を過ごして参りましょう。**

**この御言葉はとても実践的なものです。私たちが、この地上生涯で、どうやって希望を誇り、そればかりでなく、苦難をも誇りと出来るかのプロセスがこの御言葉には詰まっています。私たちの地上生涯は苦難に満ちています。苦難と言うのは大きいことでいえば、私たち一人ひとりも、十字架の苦しみを味わいますし、或いは、大地震に遭遇します。そして時には戦争に巻き込まれることもあるのです。そして、小さいことでいえば、私たちは日々の生活の中で、家庭でも職場でも学校でも、そして教会でも、隣りにいる人と感情がすれ違って、小さな口喧嘩をすることがあります。この小さな口喧嘩も、苦難の一つに数えることが出来ます。この様に、私たちの地上生涯は最後まで常に苦難に満ちているのです。でも、私たちは聖書に立ち帰って、与えられた苦難のその一つひとつを誇れる者となっていきたいと願います。**

**「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を」というイエス様の御言葉は、私たちが日々の生活の中で具体的に苦難に遭遇した時に聞かれて働いて、私たちを動かします。もちろんそのプロセスの底流にはキリスト信仰が常にありますが、その信仰をもとにして、この御言葉は実際によく働いて下さるのです。私たちは、この御言葉の意味を、そう言った実際の場面で、益々豊かに知り、御言葉を味わい、益々、キリストの平和にあずかり、苦難をも誇る者へと変えられていくのです。そして私たちは御言葉が豊かに働かれる時に、キリストがそばに居られて、神の愛が私たちの心に注がれていることに気付かされることでしょう。**

**この様に実践的な御言葉ではありますが、先ずは、その内容について少し説明したいと思います。先ず、「練達」という語句ですが、この言葉は日常用語ではありません。ですから今まっさらな状態で、練達の定義を言いますと、火で精錬（せいれん）して吟味（ぎんみ）するという意味となり、つまり人間の中の不純なものが除（のぞ）かれて、ますます純粋になることだと言われています。この定義を今、純粋に心の中に納めましょう。**

**次に、「忍耐」ですが、この語句は日常用語でもあります。私たちはしょっちゅう忍耐と言う言葉を使って、何らかの辛い状態にあることを表明しますが、実は、日常用いる忍耐と、聖書が語る忍耐の意味合いは、完全に重なっている訳ではありません。**

**大雑把委に言えば、日常用語としての忍耐は、「石の上にも三年」ということわざに代表されるような姿勢です。つまり、どんなに辛い状況の中でも、黙って同じ処に座り続けていれば、長い歳月の内に、いつかは良い結果がもたらされるだろう、といったすごく受け身で、何もしないという事を推奨するような忍耐です。実はこういった意味での忍耐は、聖書が語る忍耐とは正反対の意味なのです。**

**聖書が語る忍耐とは、こういった受動的な忍耐ではなくて、能動的に人生における苦難と向き合って、それを一つ一つ乗り越え、克服していくというプロセスのことです。**

**実はこの２、３年で、俗世間でも忍耐の意味合いが受動的な意味から、聖書的な能動的な意味合いへと移っているように思います。会社は新入社員に対して、最早、「石の上にも三年」と言ったような忍耐を求めてはいないようです。むしろ次々と容赦なく会社を襲ってくる苦難に対して、力強く立ち向かってそれを解決してくれるような忍耐力を持つ人材を求めている様です。**

**そして、今、あちこちでハラスメントの実態が明るみに出てきて、裁かれています。このハラスメントと言うのは今に起こったことではなくて、数十年と言った長い年月の間、ひそかに行われ続けて来たことです。そのハラスメントが長期にわたって続けられたというのも、社会全体が、「石の上にも三年」的な忍耐を美徳として推奨して来た結果だと思います。又、戦争に巻き込まれている時も、私たちはただ受動的に忍耐しているだけでは、かえって戦争状態を長引かせるだけという事にもなりかねないのです。**

**この様に、忍耐にもいろいろあって、忍耐の仕方と言うのは、私たちの生き方、在り方を大きく様変わりさせていく要因ですので、私たちは注意を払わなくてはならないでしょう。**

**それでは聖書が語る忍耐とはどういう事でしょうか。先ほどそれは能動的に人生における苦難と向き合って、それを一つ一つ乗り越え、克服していくというプロセスのこと、と説明しましたが、これでは分かったようで分からない説明なのではないでしょうか。苦難と言うのは私たちに具体的に襲ってくることですので、それに忍耐するという事も、具体的に、今迄生きて来た信仰者たちの生き方や姿勢を見ていく事が一番だと思います。**

**まず、今日の旧約聖書、出エジプト記17章１節～を見てみましょう。イスラエルの人々の共同体全体は、荒れ野の中にあって、飲み水がない、と言って争いを始めました。指導者モーセを撃ち殺そうとして暴力を振るい始めました。なんと無駄なことでしょうか。暴力を振るう前に、手分けして水の在り処を探し出すことの方が余程有益です。人間の愚かさがここに苦難を生み出しました。この争いと言うのは、全く人間によって引き起こされたことで、主なる神はもう人間を見捨てても良かったかもしれません。しかし、主なる神はそうはされませんでした。ここから主なる神の忍耐そして人間の忍耐が開始されます。主なる神は言われました。**

**「イスラエルの長老数名を伴い、民の前を進め。また、ナイル川を打った杖を持って行くがよい。見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。」そして人間達は、この神の御言葉に従順に従って、神の御前でホレブの岩を打ち、岩からは恵みの水がほとばしり出たのでした。**

**このイスラエルの人々の共同体全体に起こった出来事を見てみますと、主なる神は決して苦難に遭う人間を見捨てることはなさらない、という事が分かります。そして主なる神を信じて、御言葉の通りに行う者に恵みをお与えになって助けて下さるという事です。**

**モーセとイスラエルの長老数名は、民の前を進み、神の御前でホレブの岩を鞭打ちました。この能動的な行いこそ彼らが示した忍耐であったのです。**

**次にもう一人、エレノアと言うパレスチナ人のクリスチャンが証した忍耐について具体的に見て参りましょう。エレノアの証言は、二日前の世界祈禱日別府集会で用いたこのテキストに詳しく書かれていますので是非ご覧ください。又、世界祈禱日に参加された方々には以下の話は重複しますが、再度味わって頂ければと願います。**

**エレノアの先祖は今から約２００年前にエルサレム旧市街にキリストの教会を設立しました。そして今から７６年前のナクバの大惨事によってその教会は破壊され、彼女らの家族は難民となりました。これだけ聞いても彼女とその一族が歩んできた地上での歩みは非常な苦難の連続であったことが分ります。そのナクバの大惨事では、パレスチナ人とユダヤ人との戦いによって教会は破壊されました。でも、避難をする前に、ユダヤ人の隣人が、教会の大切なイコンや聖餐のさかずきをあずかってくれた、とエレノアは証言しています。**

**彼女の証言は、キリストが言われる隣人愛の実践そのものです。彼女は証言しています。「私たちは地域社会でも又、世界的レベルでも、それぞれの場所で生きている全ての人たちと向き合うという事を、選び取ってきました。両親の姿から、どんなに苦しく辛い時にも、他者と共に生きることの大切さを学んだ」と彼女は言っています。**

**ここにとどまり、神が私を愛して下さったように、イエスの教えである「他者を愛すること」を選びました、と彼女は言っています。他者を愛する、という言葉は、隣人を愛するという言葉以上に、力強く響きます。なぜなら彼女が言う他者、には、敵とみなされるユダヤ人をも含まれているからです。すなわち彼女とその一族は、イエスが言われる、汝の敵を愛しなさいという御言葉をも、実行してきたのでした。**

**エレノアにとって、2023年10月7日ハマスのイスラエル侵攻によって始まった今回の戦争も、はじめての戦いではなかったのでした。**

**私たちは彼女の証言を聞いて、イエス様が、試練と共に備えて下さる逃れの道が、息の長い道のりであることを知らされます。その逃れの道は、信仰によって、彼女の両親から彼女へと引き継がれました。彼女の両親は、大切にしていた教会のジュウ器がユダヤ人の隣人達から実際に受け渡される前に、天に召されましたが、信仰がエレノアに引き継がれたことによって、そのジュウ器ばかりか、それ以上に大事な、「愛をもって互いに忍耐しなさい」という主イエスの御言葉が彼女へと受け継がれたのでした。**

**この様に、何世代にもわたりながら、主イエスの逃れの道は実現をしていくのです。**

**エレノアは言います。私はイエスの教えである「他者を愛すること」を選びました、と。**

**この選ぶという事は、積極的に他者を愛する行動を行っていくという事でしょう。私たちは「愛をもって互いに忍耐しなさい」と主イエスから言われて、そして具体的な行動へと送り出されていくのです。**

**主イエスが私たちに勧めておられる、忍耐するということの中身は今日のエレノアの証言を黙想していけば一番明らかになることでしょう。戦っている相手であるユダヤ人をも愛するという事はエレノアや彼女の両親たちにとって、どんなにか忍耐の要ることだったでしょうか。しかし、その隣人愛の行いがやがて実を結んで、彼女たちはユダヤ人の隣人を得ることが出来たのでした。**

**このようにエレノアとその一族は長い年月にわたって次々に襲って来る苦難に愛をもって立ち向かって「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を」という御言葉を実践してきたのでした。**

**翻って、今、日本に暮らす私たちはどうでしょうか。今私たちの身近には戦闘状態はないものの、私たちの一日一日も又、苦難に満ちているのではないでしょうか。私たちの日々の苦難は小さなようで又大きなことでもあります。私たちはエレノアの様に忍耐して、全ての人たちと向き合うという事が中々できていません。今、私たちの周りには何万人と言うキリストの福音を知らない人たちがおられますが、私たちはその方々を積極的に教会に招いていくという事にしり込みをしてしまいます。又、教会に集うという事自体が、異なる他者と向き合うという事であり一つの忍耐でもあります。**

**しかし主イエスは、「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を」というプロセスを私たちが経験していく事を今強く願っておられます。**

**主イエスがすすめる忍耐とは、私たちが一つの苦難にうつうつととどまり続けることではありません。主イエス御自身も、受難の十字架の苦難を一回だけ忍耐されましたが、今は、天の父なる神の右に居て、私たちの為に、私たちの体のかしらとして、日々新たな忍耐を私たちと共にしていて下さいます。その主イエスの忍耐を覚えつつ、新しい日々も積極的に新しい忍耐をして参りましょう。**

**祈り**

**主よ、受難節にあって、御子イエスの十字架の苦しみを覚えます。御子が私たちの罪の為に死に、復活されて、今も、あなたの右に居て、私たちの為にとりなし祈って下さることを感謝し、御名をほめたたえます。**

**御子イエスは今も、わたしたちの教会の頭として、私たちと苦難を共にして下さいます。私たちが受ける小さな苦難も、大きな苦難も御子の十字架の苦難に勝ることではありません。私たちも御子のゆえに、忍耐し生きながらえることが出来ます。苦しみの中に希望を見出すことが出来ます。あなたから愛されるゆえに、隣り人を愛することが出来ます。**

**これらの恵みを下さったことに感謝します。私たちが愛をもって互いに忍耐し、聖霊によって一致し、まことに主の体として繋がっていく事が出来ますように。**